



石川県における鉄器の導入と社会の変化

林 大智（調査第1課）

今回の報告では、県内において弥生時代から古墳時代前期に、鉄器の普及と所有がどのように進行し、その結果、集落や墳墓にどのような変化が表れたのかということを中心に考えた。

鉄器導入の画期と導入ルート

県内では弥生時代中期に鉄器の導入が開始され、定量の鉄器導入が開始される弥生時代中期後半、ほぼ全ての器種が出揃うと共に簡易な鍛冶技術が普及し、小型で地金の薄い集落出土鉄器と、大型で重厚な墳墓出土鉄器の差異が顕在化する弥生時代後期後半、鉄器出土量の急増に対応するように高温加熱処理による鍛冶技術が定着し、副葬品の主体が鉄剣から素環頭大刀・刀子や鉄刀に転換する弥生時代終末期、新たな鍛冶技術が導入されることで集落から出土する鉄器量が減少し、鉄器組成の中で農具の占める比率が高くなる古墳時代前期初頭に画期が認められる。鉄器や鍛冶技術の導入ルートについては、日本海沿岸地域の交流によりもたらされた可能性が高い。

その他の道具の変遷

石器・木製品などの変遷にもいくつかの画期が存在し、鉄器や鍛冶技術の画期と密接に関連していることが伺える。具体的には、砥石や鉄斧柄など鉄器の導入を示す資料が出現する弥生時代中期後半と、鉄器の普及を示す資料が定着し、木製農具の出土量が増加すると共に地域色が顕在化する弥生時代後期後半、玉作りなどで集中的な生産が開始される弥生時代終末期に画期が認められる。また、玉作り遺跡が急減することなど古墳時代前期初頭にも大きな変化が認められる。

日本海沿岸地域の交流

道具やその生産技術・体制が変遷する背景には、日本海沿岸地域における交流の変化が大きな要因となった可能性が高い。この地域では弥生時代中期後半に遠隔地間交流が顕在化し、道具変遷の大きな画期である弥生時代後期後半～終末期には活発な交流が行われ、墳丘墓・舶載鉄器・木製容器など首長層に付随するような道具の交流も行われた（第1・3図参照）。また、玉製品は舶載鉄器の主な交換財として用いられた可能性が高い（第1・2図参照）。

鉄器の導入と社会の変化

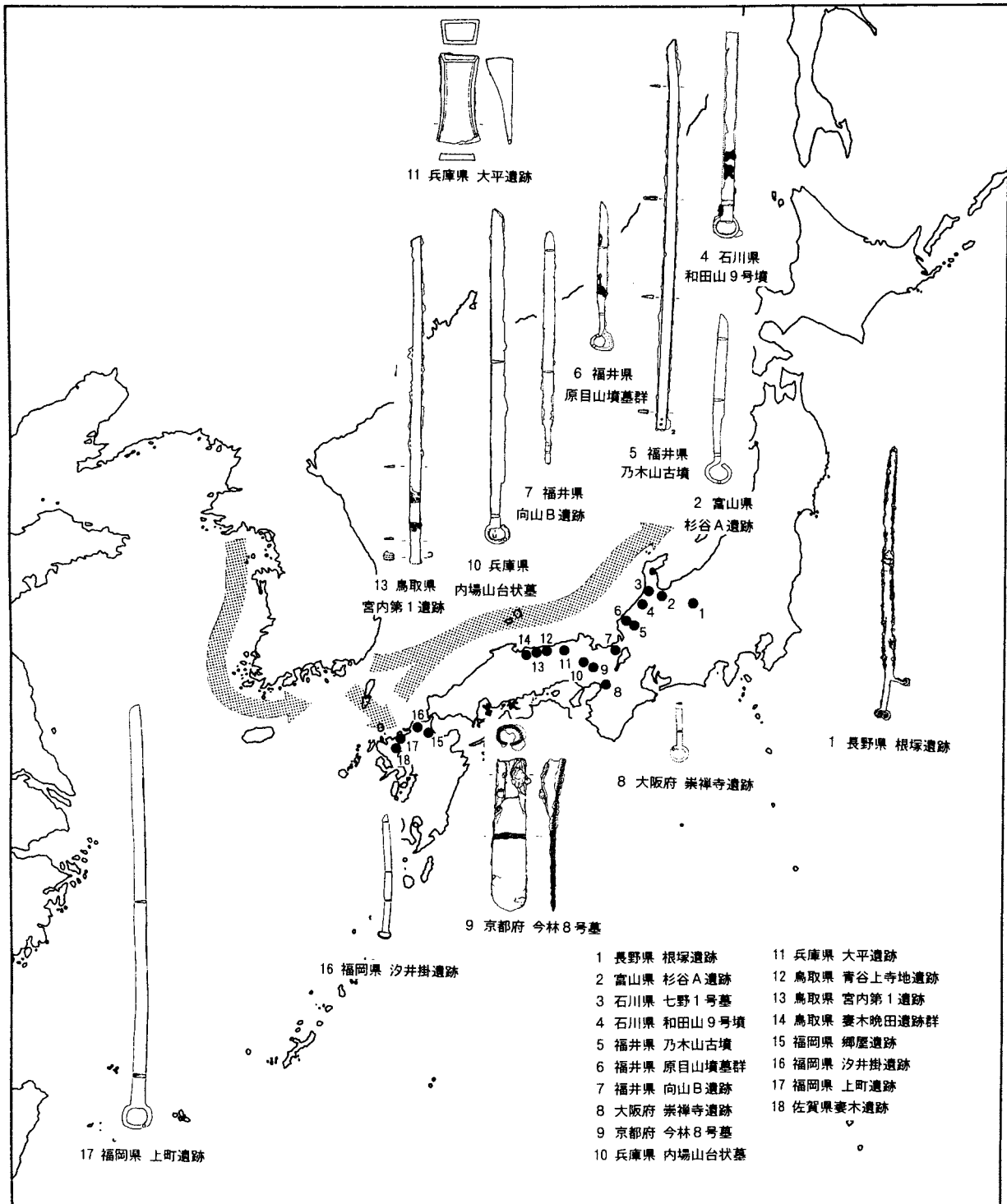
日本海沿岸地域間における交流の変化や道具の変遷は、集落・墳墓の動向にも大きな影響を及ぼしたと思われる。集落・墳墓の動向をまとめると、拠点集落が衰退して近隣に中・小集落が出現する弥生時代中期後半、集落が急増すると共に手工業生産を集中的に行う集落も出現し、鉄器を副葬する墳丘墓が出現する弥生時代後期後半、首長居館の出現など集落間に明瞭な格差が表れ、前方後円墳や前方後方墳が出現する古墳時代前期初頭・前半に画期が認められる（第4図参照）。

まとめ

以上のことをまとめると、鉄器や鍛冶技術の変遷は、弥生時代中期後半と後期後半に大きな画期が認められる。この画期は鉄器以外の道具の変遷や、日本海沿岸地域における交流の変化とも連動しており、交流の変化が様々な道具を変遷させる大きな要因となっていた可能性が高い。それらのなかでも、工具の鉄器化や交流に伴う製作技術の伝達は、手工業生産体制の変化を引き起こした可能性が高く、この生産体制の変化や集落と墳墓における鉄器の差異、すなわち首長層における遠隔地間交流の掌握が、階層化の進行を促進させ、古墳時代に向けた社会変化の大きな要因となったと考えられる。

【引用・参考文献】

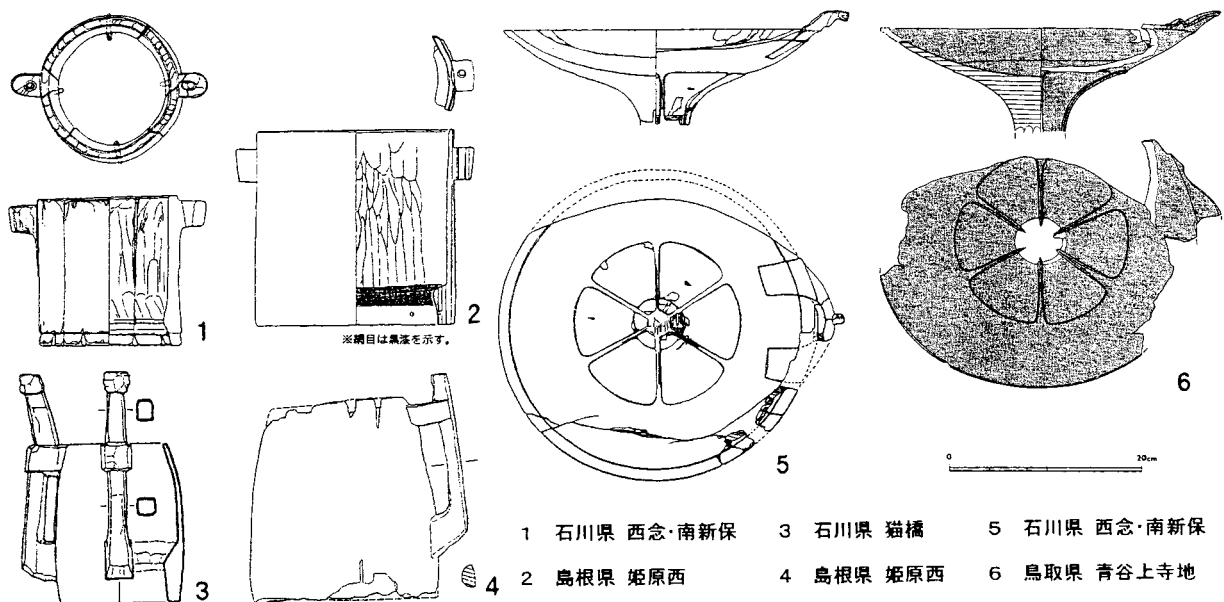
- 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 岩波書店
 木田 清 1997 「第6章 古墳時代以前の集落」『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会
 林 大智・佐々木勝 2001 「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『補遺編』
 石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会



第1図 日本海沿岸地域周辺における弥生時代後期後半～終末期の主な船載鉄器

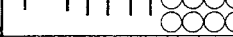
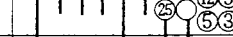
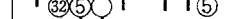


第2図 弥生時代後期の玉作り遺跡の分布〔河村1986〕



第3図 弥生時代後期の北陸・山陰地域の木製容器 (S = 1 / 8)

⊗は比高数 m、○は平地立地比高 0 m

時期	地域	南加賀	北加賀	能登	計	継続率(%)	
弥生中期		0		8 	4	12	25
猫橋		1		4 	1	6	83
法仏		2		17 	14	33	48
月影		6		19 	13	38	26
白江		5		11 	8	24	50
古府クルビ		3		12 	5	20	20

第4図 弥生から古墳時代村落の消長とその立地〔木田1997〕